



華麗なる図書館利用者のための

Cool Librar

クールリブラ

講座

カジのうら若き青春黙示録

文/カジ

予想していなかった言葉を聞くとき、
人は予想していなかった言葉を聞く。

【前回までのあらすじ】

学校嫌い、勉強嫌いの中学生カジ少年が、学園のマドンナ千絵ちゃんと出会うことによりふわっと成長していくという、ほんわかストーリー。好奇心で覗いてしまった交換日記から、千絵ちゃんに彼氏がいることを知ってしまう…

わりいな、最後までつきあってもうつけ。

妖怪ウォッチをほとんど知らないカジが動のみで語ってみる

主人公サトルが祖父の形見として譲り受けた時計、それが妖怪ウォッチだ。妖怪ウォッチの針を12時に合わせると、その時々のアレで様々な妖怪が現れる。妖怪といってもわりとポップなやつが多く、軽いノリで人を驚かせたりキュウリを盗んだりするのだ。サトルとの攻防の末、最終的には『ゲラゲラボール』という呪文を唱えることで、妖怪たちはトボトボ家路につく。

「学園のマドンナに彼氏がいた」

突きつけられた真実は、あまりにも残酷であった。が、そんなことは当然ありえる話だし、たとえ彼氏がいなかったとしても、彼女が自分とどうこうなる可能性なんて、元々ナノレベルだったわけだし…

そう自分に言い聞かせながら数日を過ごすカジ少年。学校へ行けば隣には千絵ちゃんがいる。ただ、その千絵ちゃんとは他人のもの。今回ばかりは千絵ちゃんの隣の席であることが辛い。表面上は笑顔でとり繕いながら、心は寒風吹きすさぶツンドラ地帯。胸の苦しみはまさに永久凍土。この気持ちが溶けゆくことはあるのだろうか。

そんなフガフガなある日、件の彼氏ユウジ君と廊下ですれ違う。伏し目がちにやり過ごそうとするカジを、ユウジ君が引きとめた。

「カジくん、ちよつといい？」

「あつう？」

突然の呼び止めに、動物系の声を漏らすカジ。ああこれはアレだなあ。俺の女にちよつかい出すな系の話だなあ。最悪ボデイの2、3発浴びるなあ。

人目に付かない階段の踊り場に到着し、ユウジ君が話を切り出す。

ユ「俺が千絵と付き合ってるの知ってるよ
ね？」

カ「まあ…（千絵って呼び捨てかあ）」「
ユ」でさ、気付いてるかもしれないけど、

「千絵の気持ちはもう俺じゃなくて

お前にあるんだから、がんばれよ！」

カ「え、えっ？ うん、ありがと…」

マジなのこれ？ マジなのこれ？

なにこの流れ… 薄いとこ引いたわ。

